

# ■宝が池シンポジウム 第3部 記録（質疑含む） / 市長あいさつ / 全体まとめ

2015年3月22日(日) 15:00~16:50

(記録作成:緑化協会・野田)

## パネルディスカッション

### 1) パネラー紹介

#### ○鎌田（コーディネーター）：日本生態学会

昨年秋、自然再生講習会を京の里山の再生について京都府立大学で実施。

宝が池周辺における里山再生への関心と協力をおしまない。

本日はそのフォローアップという位置づけ。

#### ○3部からの参加者紹介（鎌田からの紹介）

- ・岩崎氏 松ヶ崎自治連合会会長、松ヶ崎立正会常任理事。松ヶ崎地元代表として登壇。
- ・上田氏 国際会館から参加。
- ・奥井氏 明德小学校協議会理事長。学校で里山林をも、学区・PTA で取り組んでいる。
- ・高谷氏 京都宝の森をつくる会代表。  
宝が池周辺の森にほれ込んで市民団体をつくってしまった人。
- ・野田 京都市都市緑化協会・宝が池プレイパーク運営。大阪自然環境保全協会所属。  
市民活動のプロ？

### 2) レジメからのキーワード紹介（スクリーンの見ながら簡単に説明）

3部のパネラーのレジメに出ている

キーワードを解析してもらった。(右図)

その中でたくさん出ている言葉は

**「宝が池・自然・森」。**

「宝が池」より「里山」が大きい。

すなわち、「里山」に非常に関心が大きい。

その次は「自然」という言葉だが、同時に

「人」が大きい。里山にどのように人が

関わるのか。森・自然をどのようにして

いくのか、本日ディスカッションして

いきたい。



### 3) ディスカッション

鎌田：まずは振り返り。ナラ枯れで山全体がやられている。その後にナンキンハゼが入っている。さらにシカ食われて芽生えが出てこないという、ふんだりけつりの里山だが、その中で誰がどうしていくのかがこれからの問題。

また、シイ林化していつている。その途中でマツ枯れナラ枯れやシカ害がおきてきている。土壌の流出なども起こっている。それにどのように対応していくのか。

市は新景観創造事業を立ち上げてこれらの問題に対応していきたいといっている。

それらをベースに、今後どのように対応していくかについて3部で話を進めていく。

柴田：問題がいろいろと変化してきているが、何が問題かをあらためて提案する。

- ・日本中の里山を回っていると、人が手をつけた山を途中で放り出してはいけない。

- 未来永劫手を加え続けなければいけないという人が必ずいる。それは正しいと思う。
- ・宝が池の問題も、マツ枯れだけは外来種問題で難しいが、それ以外はすべて人が関われば変わる話。皆なにかせなあかんと思っている。大きくなったナラが枯れているが、薪炭林として使っていればここまで広がることはなかった。シカについては、みんな（人）がシカを安心させている。シカが出てきたらかわいい～というのは問題。シカに対して、ここは自分たちの場所でないことをわからせなければいけない。僕らで何とかできそうな問題を何もせずに来たことが今の宝が池を作ってしまった。
  - ・しかし昔のままのことはできない。変わりに何ができるか、プランの話ができればと思う。

**鎌田**：松ヶ崎周辺の里山はどんな状況だったのか、どんな風に使い、どんな楽しみをもっていたか伺いたい。

**岩崎**：（詳細レジメー当日配布資料ーあり・参照）

- ・松ヶ崎で生まれ育つ。先祖の生活の場という立場から話をしたい。平安遷都の際に、平城京から100人の百姓が移り住んだ。朝廷に米を提供するために山と農地を貸し与えられ、明治までは分家も許されなかった。「松ヶ崎百人衆」と史実には（そういう表現は）ないが言われている。昭和6年に京都市に編入後も伝統文化を守っていくため旧村民で任意団体として松ヶ崎立正会という組織をつくった。今は公益財団法人になっている京都市のとろく無形文化財の民俗文化財（妙法、題目踊り、さし踊り）、地域社会の発展のため活動をしている。
- ・宝が池ももともとは松ヶ崎が開墾したようだ。当時高野川の水をめぐる水争いが激しく、水を確保するためにお代官さんに願い出て許可され、池をつくった。明治末から宝が池と呼ばれるようになった。周りの山は松ヶ崎の里山として山一枚、田一枚ということで生活をしてきた。祖父の代までは専業農家で、子どもころは秋になると、自分の持ち山から朝、松茸やシメジをよく持って帰ってきて珍しいものでもなかった。冬になると1年中の薪を確保するためアカマツを伐り出した。「妙法の送り火」もアカマツを燃やしていた。特に火の勢いには絶対欠かせないのがアカマツ。今は地元で調達できなくなり、立正会で北山の方から一括調達しながら点火を行っている。

**鎌田**：平安時代からの話が普通に出てくるのはすごい。歴史が感じられ、受け継がれてきている事実をここで聞ける。マツタケ、シメジなどの話、送り火を灯し続けるための松の重要性も共有できら。

こういった時代のことはさておき、現状をみてあそび・楽しもうとグループをつくった高谷さんから里山に対する想いなどを聞きたい。

**高谷**：今、高校でラグビーを教えているが、宝が池はランニングコースとして学生時代から使っていて非常に愛着がある。外から見ればきれいと思っている山が実はすごいことになっていることが、シンポジウムや学習会に参加してわかり、ショックを受けたと。同時に何か手伝いたいということで発足。

- ・大切にしていることの1つ。ナラ枯れや食害などで伐採された木が散乱しているのが気になり、炭焼きをしている。また良いことであればその炭を土壌改良で使いたい。もともとの森の材を資源として使って行きたい。
- ・もう1つは、活動ステージの循環。森を知らなければいけない。勉強やフィールドワ

ークをする。問題対策として森に入ってなにかしていく。材の利用であれば例えばしいたけ栽培するなど、あそびにつなげて楽しんでいく。その循環が大切。

昔は直接的な生活の場だが、今はレクリエーションの場。そこで感じた課題を大切にとりくんでいく（チラシに3つのステージで図示参照）。

- ・‘里山アウトドア’で、ナラ枯れ燻蒸処理あとの丸太の放置、ナンキンハゼの繁茂などを私らの力で楽しみながら対処していきたい。炭を焼くのはくたくたになるが楽しい。それで焼いたシカ肉はおいしい。そういう楽しみを多くの人と共有していきたい。

**鎌田**：生活から楽しむ山へ。その中で学びのきっかけをつくっている。また里山で活動するのであれば里山を知らなければいけない。

与えられているミッションを超えてこうした学びの場や資料を提供しているのがプレイパークスタッフで、それに答えてできた「宝の森の活動（高谷さんの活動）」へとつながっている。今日のシンポは、実は3回目（府立大と緑化協会）。簡単に振り返り、シンポジウムの経過をかいつまんで説明してほしい。

**野田**：宝が池子どもの楽園、プレイパークで自由な遊び場を7年前から提供している。

ボランティアさん（中学生以上）も一緒に活動。

- ・私の長年の里山活動を生かして、伝えたいことをプログラムで実施してきたが、4年目くらいから森がおかしくなってきた。田中先生からは学生もつれてきてもらい、研究成果も提供いただき運営に反映させてきた。マツ枯れは問題になって長い年数たつので一定知っていたが、ナラ枯れというものが広がってきている。そして気がつけば、草もないはげはげの山が広がってきてしまった。えらいこっちゃということでシンポジウムを実施した。
- ・登壇者から一方的に話をするだけでなく、参加している人・学生さんなどが、宝が池がどんな山あるいは公園になってほしいと思っているのかを少しでも拾い上げるために、参加者全員によるグループディスカッションを行ってきた。そのまとめがこの要旨（レジメあり）。
- ・今、ナラ枯れは収束に向かっているが、シカの問題は広がり、当時は顕著ではなかった次世代への森への影響は今さらに顕著になっている。放っておいたらどうなってしまうかという状況。
- ・どんな森になってほしいか、それとともにどんな問題をどうやったら解決につながるか、できることからそれを対処していきたい。そのために必要なことはなにか・・・。内容は1回目のまとめにある。特に、色々な人がかかわりあって、情報共有をしていく機会・場所が絶対に必要という意見。
- ・次世代にむけて、おとうさんおかあさん、みんなが一緒になってあそびながら楽しみながら里山の知恵や技術を引きつぎ、問題も理解して行ってほしいという想いをもって運営している。同時におとな向けの学習会も展開している。

**鎌田**：使っていく資源、資本である里山がつぶされていっているということは緊急事態でこれを共有しなければということでシンポが開かれたということ。

- ・森のイメージの中で、「明るい森」などの意見の中で、「安心して迷える森」というのが印象的だった。危険はないけど少し冒険はできる。
- ・山は使っていくことで愛着が生まれる。人の心をつなぐ、みんなで行きつむことが重要だが、そのみんなで行きつむている事例、明德小学校の展開について紹介をお願いしたい。

**奥井**：活動場は学校の観察林で、所有は京都市、管理を小学校に任されている。

- ・本来、宝が池・北山から連なっている山だったが、区画整理事業・市街地造成によって独立してしまった山。区画整理によって山の一部を京都市が所有することになり、学校に使いなさいということで提供された。周囲1 KMの小さな山だが自然を相手にするとなるとなかなか大変。周辺は住宅街で「山の雑草が迷惑」と学校に苦情が寄せられた。学校として責任はあり、京都市に報告下結果、草刈のお金もついた。しかし雑草すぐに刈れないということで、PTA会長時代に校長から相談を受けてはじめた。
- ・地権者3名で境界があいまい。京都市と地権者3名に了解を得て作業を開始した。草刈をしていると周辺の人が手伝ったり話をしてくる。昔はどうやった、でも今は使い物にならへんな・・・という話が出てきた。草刈りだけでなく全体を里山に戻してみんなの憩いの山にできないか、ということで柴田先生に相談し、里山勉強会を実施。知らなかったことをいろいろ教えてもらった。
- ・人の手を入れなければならない。木を伐っても（全部伐ってしまっても）里山は再生すると聞いて変な自信をもった。木を伐ることは自然破壊と思っていたので、地域の人と知識を共有して木を少しずつでも伐っていくことが里山の為だと言うことで、活動を続けている。
- ・学校運営協議会の中に里山保全推進委員会を立ち上げて、そこで企画をして、地域の人、地域の企業、京都市の京のアジェンダ21フォーラムにも協力いただき活動をおこなっている。地域の山なのでいろんな人にはいってもらおう。
- ・里山は響きもいいので多くのボランティアに集ってもらえるかとは思っていたが、実際はそうではなく、地域の方が地域を愛するから地域の山を何とかしていこうということで集まっていたいている方、プラス企業の環境活動のメンバーと手を合わせて実施している状況。

**鎌田**：重要な点があった。「ボランティアは来てくれるだろう」・・・しかしそんな簡単に来てくれるものではない。お金がないからボランティアと言う考え方はダメという例。また企業CSRの大切さも紹介された。防災教育で使っている例や伐った材を使うなどの学校同士の広がりについて補足を。

**奥井**：予算がないと、簡単に活動ができない。京都市や府の地域活動補助金があるが、単なる雑草狩りや里山保全というだけでは補助金はもらえないので、まきをつくって防災のための薪棚を作り、いざと言うときに使えるように・・・など企画をねってもっていくと活動資金につながる。そういうことをやっていると周辺の学校からも活動を聞かせてほしい、分けてほしいなどの声がかかっている。竹を伐らせてほしいなどの横のつながりも広がっている。

**鎌田**：徳島のNPOを行っているが、熱意の大きさが重要。行政は貧乏なので頼れない。地域主体の熱意、同時に申請書を書ける人が重要で、そういうことも大切。

さて、京都市の新景観事業についてももう少し詳しく説明を。

**大西**：具体的なものは決まっていない。高山の部分から行政で・・・と考えている。

- ・先生方からの話にもあったように、ここはチャートという地層で、木を植えるには難しい山であると思っている。皆伐をしないと難しいと言う面もあるようだ。

高山では実際に掘ってみた。ふかふかして 50 センチくらいはスコップで掘れたので、植栽にふさわしいかと思っている。東側はチャートがごろごろしている。手始めに高山でやってみるといふことで予算を要求。池周辺全体に広げたい。

- ・今年度は整備用の園路を予定。できれば 28 年度くらいから具体的に進めたい。財政危機で植樹や伐採のお金はないので寄付でと考えている。企業 CSR に使ってもらったり、地球環境の聖地ということで海外から国際会議に来られた方に事業に賛同いただけるようパンフレットも作り、共感（共汗？）度アップしながら進めていきたい。

**鎌田**：地域の愛着や地域の思いもあるので、意見交換をしながらすすめていければよいだろう。

国際会館も、里山の恩恵を受けているといえるように思える。話をうかがいたい。

**上田**：この建物は設計コンペで建てられ 50 周年を迎える。自然の中で現在の建物がある。

- ・景観ということ言えば、ビューポイントが大切。通常市民の方は宝が池をみて比叡山の山並みと国際会館の水平ラインというものを見るだろうが、もう一方の視点として、会館で会議に参加されている方は庭園と池の水面と奥に山並みがある。このような環境の中での国際会議がおこなわれ、議定書もできた。休憩時間に眺めを見たこともプラスになったのではないか。
- ・京都の風情というか日本の風情、すぐれた景観の中に国際会館がある。こうした優れた環境をこの先 50 年 100 年と残していく。周囲の自然が継続していくことが重要。建物を管理するものとして守っていきたい。

**鎌田**：視点場として、‘利用している方が見る風景’と‘国際会館内から見る風景’があり、世界の人たちにどういふメッセージを伝えるかという点で景観のあり方を考えるという中で、景観の裏にある「人と自然のかかわり・物語」をどうつくろうとするのか、それをどのように伝えるかということが重要だろう。

ちょっとずつしか進められない、共感を得ながら進めていくにしても、ナラ枯れシカの影響・・・これをどんなふうに対応するか。放っておいたら全部なくなるかもしれない。緊急的にやらなければならないことはなにか。

**長島**：地図があるのでご覧いただきたい。特に宝が池公園の山で問題の中で重要な課題となっている部分を色で示している。（図参照）

シカの食害から森を守るという点では、ひとつはシカを減らしましょう、もうひとつは柵を作って守りましょう。シカの数減らすことはなかなか難しい。緊急性が高いところ、特に守っていききたい重要な植物があるところは、柵で囲ってシカが入らないようにすることが必要。どこからやっていくかが大きな課題。

<図の解説>今のところ重要と考えられるのは

- ・ミヤコツツジ、カラコギカエデなどのめずらしい植物があるところを守る。ピンクのところはコバミツがきれいなところだが、枝を折って上の葉っぱまで食べるという被害が出ているので、ツツジを守るにはこういうところにも必要。
- ・ナラ枯れがひどく、下の植物が食べられているところ。植物を回復しないと危ない状態となっているところサクラの森周辺。こういう場所では大きめの柵を設置し、植物の回復を促していく。
- ・またシカが出入りすることや植物をたべてしまったことにより、土がどんどん流れて

しまっているところがある（子供の楽園の奥など）。そういうところでは植物の回復が必要だろうということで、そこでも柵の設置をしていく処置が必要だろう。

- ・ナンキンハゼがナラ枯れあとを拠点にどんどん広がっている。今生えているところだけでなく、そこから広がっていることを抑えるために、伐る。1回や2回ではだめだけれどもそういう駆除が必要になってくる。
- ・次の世代の実生・稚樹が比較的残っている場所では柵を設置して、まわりの植生回復の拠点として守っていく必要がある。
- ・ここに示したものを把握できている最重要地区、早めに対処していかないと守っていくことができないと判断している場所
- ・それ以外にも無頭柄のアカマツ林を再生させたい、コナラ・アベマキなど枯れてしまったが、それらの樹林として守っていききたいなという考え方もあるだろう。それらも含めてみなさんでどんな山にしていきたいのか、全体の次ビョンを考えながらみんなで守り育て、100年後の子ども・世代に継承していくのが、みなさんで議論しながら活動していくことが重要だろう。

**鎌田：**問題のひとつは次の世代にどう伝えるか。

- ・シカ柵、わな、猟銃 個体数調整をするか、資金も時間もかかるので 緊急の対策をしなければいけないということで、専門家からの情報として、これでいいのかも含めて精査しながら進めていく必要がある。短期的に集中的にやらなければいけない。
- ・公園として利用していく場としては、道を歩いていて倒れてきたというのは危険なので、ナラ枯れの伐採もしなければいけない。そういうリスクも排除していかなければ。心配事が他にもあるのでは・・・どうしたいと思っているのか、地元から意見を。

**岩崎：（資料参照）**生活の場として使っていたが、京都市が管理するようになって入らなくなってきた。公共的なことができなくなった。死んだような状態になっていると感じる。

- ・大雨で土砂災害も問題になっている。温暖化の問題もある。生態系も富栄養化が進み、特に、南側の斜面ではシイの林で覆いかぶさるような状況になっている。林床に日もあたらない。さらにシカで下草がはえていない。従来山が持っているスポンジ状の保水機能がなくなってきたのでは心配。最近は大雨の際崩落する場所も出てきている。伐って生き返らせていかなければいけないが それが今できない。巨大化したシイを見ていると恐怖だが、我々素人の力ではどうしようもない。なんとか伐ってもらいたいと思っている。
- ・エコ学区のモデル学区で地域活動を進めた。地域活動として環境に目をつけ、水（にごり）、農、里山をテーマで取り組んだ。エコ学区推進協議会を立ち上げて、まず宝が池の水がどうにかならないかということで、水すまし大作戦＝自然浄化能力を高めるための実験を行った。地域の子どもたちとボートを出して取り組んだ。効果には何年もかかるので期待しているところ。山の勉強会では、小学校の環境教育として地域・保護者と一緒になって里山の整備をした。温暖化対策室の指導・協力、専門業者も選んでサポートしてもらい、モデルケースとして一部伐採し、グラウンドでどんど焼きやしいたけのほだ木づくりを行った。目標の森ということでは、「楽しめる森、明るく広々とした森、四季折々の花がさき、実がなり、紅葉（こうよう）があり、季節の変化に富んだ森、野鳥や昆虫がたくさんいる森」。そのためには、「常緑樹ではなく落葉樹が多く、一部にアカマツが残る森」「低木の密生ではなく自由に歩き回れるほどの密度の森がよい」というのが勉強した結果出てきた像。

- ・伐採は、妙法の山については京都市の助成を受けながら伐採を毎年やってきている。ツツジだけは残す。ツツジの山にしようという方針。ツツジは残してきたが、今は新しい目が出てこないという状況で、何とかしなければと思っている。
- ・シカについては農業被害ということで、猟友会（洛北支部）の協力で、鳥獣保護区だが、対処してもらっている。
- ・山に人が入らないとなかなか維持できないことを実感している。行政サイドに伝えて、協議していく場を設けていただかないと我々だけでは対処しきれない。子どもたちが山に入って活動することも続かない。
- ・以前は狐坂まで車が止められたので人がこちらからも入っていた。規制もきびしくなり減っている。にぎわいという面で・交通の面でも検討が望まれる。会議場からの景観もよいが、市民に開かれた森ということでいえば西側の交通の便も考えてもらえれば、シカへの影響なども変わってくるのではと感じている。

**鎌田**：松ヶ崎の家の上を覆うようにシイが生えるというシイ林化の問題。

子どもから大人までが楽しめる森、などが話し合いの中で合意された意見として出てきていることが紹介された。

いろいろな問題や意見があり、それを話し合う協議の場が欲しい。話あっていくことは重要である。

このような森の状況、リスクがある中で、どのようなやり方で山を生き返らせる可能性があるか手法について伺いたい。

**柴田**：わきの山で伐っても良いといったのは若い山だから。宝が池の山は年取りすぎで伐っても若返るかは不安な状態。

・話を聞いていて絶対に視野に示れないといけないキーワードは「防災」という視点。林床植生がなくなるだけでなく土が流れている。放置が進んだ里山はメタボといえる。成人病がすすんでいくとどっか悪くなり痩せていくが、今そこにまできている。「防災」という言葉を使うと‘ボランティアは来てくれない’では済まない話になってくるだろう。そういう話もしていかないといけない。

・特にこの辺りの山は ゆるい斜面でも大雨で突然流れたりする可能性がある。隣接するところに京大の演習林があるが、そこでもずり落ちたところがある。そういうことが起こる。木を植えやすいだけでは安心できない土で、劣化してしまった土を何とかしないといけない。土留めをするなどの対策をしなければいけない段階にきている。

・生活をおびやかされかねない状況で、それも含めて話し合わなければならない。ナンキンハゼが広がっていることやツツジがなくなるどころではすまされない・・・近い将来そういう状況になりかねないことを認識しておく必要がある。それも視野に持ちながら、管理を真剣に考えなければならない。

**鎌田**：いろんな問題が出されたが、それをどのように話し合い、財政的・金銭的なことも大切に、そこでどう活動・行動につなげるかコツやヒントのようなものなど経験から言えることを伺いたい。

**奥井**：規模が違うのだが、継続的活動に持っていける何かをつくらないと難しい。周囲が1キロの山でも、地権者3者＋京都市＋小学校には校長先生が変わってもこの活動が続けていけるよう、関係者で「協定書」を作ってもらっている。単発的な計画では難しい。そういう点からも宝が池の難しさがあるのではないか。そのあたりからはじめ

て行くことが必要で、京都市だけのはなしではないだろう。

**鎌田**：マネジメント、継続の仕組みはものすごく大変で、事務局の仕事は重要。

・徳島大学学生が宝が池の協働の状況を調査した。プレイパークを中心に作られていく人（ボランティア）のネットワーク、プラス今日も登壇した学会を率いるような錚々たる重鎮・研究者がひかえている。それ以外にも多くの大学や研究所もかかわっている。これに宝の森や、地域の方も加わっている。

これで協働の場・プラットフォームはできていると思うが、問題は誰が仕切るのかということになる。フィールドワークしているとどう動いてよいのかわからない面も多い。人をまとめる事務局があれば活動を進めやすくなると思う。

・生態学会で「覚悟が必要」＝やりきる覚悟というのが話題だった。

生態学でおさまらずに、マネジメントの仕組みをみんなで考えていく時代、協働で動いていく物語が大切。企業 CSR がお金を出すか考える時、物語の美しさや大きさが、企業を動かす今のインセンティブをつくっていくのだと感じている。

・ただ木を植えるだけではお金は出てこないだろう。おもしろみがない。どんなふうに植えるか、どんな人がかかわるのか、物語をつくりだしていくことが必要。

・今日の議論のキーワードをリアルタイムで出してもらっている（スクリーン）

この人たちがこんなマネジメントしてくれると物事が進む という具体化が必要で、まずは研究者が「やります」と言ってくれるとよいのですが……。長島さん、丹羽さん、いかがでしょうか

**長島**：生態学会の話。「覚悟がありますか」というテーマだった。覚悟をもたないと物事は進まない。全国的な問題になっている。これだけの人が集まっているので、あとはプラットフォームだけと感じる。ぜひ一緒になって進めていければと思う。

**丹羽**：すでにリアルタイムで記録を作れと仕事をふられている時点で、覚悟はできている。

**鎌田**：これから進んでいくと思うし、もっと色々な意見をどうやって吸収していくか。プラットフォームができるとお金もとってこれるし、活動の素地もできると思う。集っているみなさんが次に進んでいける声かけの場になっていけばと思うが、室長いかがか？

**大西**：京都市として責任ある立場と認識している。宝が池公園・緑のプラットフォーム（仮称）を立ち上げていければと思っている。

一見バラバラに見えても宝が池の自然環境をしっかり守っていく組織になればと思う。色んな方が集っている。お話を聞いていると全体は部分の総和ではないという言葉があるが、1 + 1 は2ではなく3・4になるだろう。

しっかりと物語を大事にしながらここで一緒にやっとう、寄付をしてもよいと思われる 魅力的な仕掛け作りを考えながら事業を進めていこう、世界へ発信していこうということですから、海外の人が関わってもらえるようにできればと思う。

#### 4) 質疑（会場からの意見）

**Q1**：名神高速の法面に木を植える活動を行っている。ほんのわずかな場所だが。地元宝が池はきれいな森だと思っていたが意外に重症である。大西室長に伺いたい。



宝が池の現状は人間の病気であればどういう症状であると思うか、どういう手を打たなければいけないか。場合によっては市長もいらっしゃるわけなので、特別な予算でも救わなければいけないのでは。京都の宝と言われたが、京都市の宝である宝が池。ぜひその辺を考えて、お答えいただきたい。

(鎌田・質問確認)今日の議論を踏まえて、答えられる範囲でお答えいただきたい。

ただし、お金のことはここでこたえ発言できないのでご勘弁いただくとして。

⇒A1 (大西) : 診察をする立場ではないが、見た目は大丈夫だが、大動脈に脂肪がだいぶ溜まっている・・・放っていたら重症になるのかなあ。という理解。根本的にしっかりからだを動かして新陳代謝を良くしていくことが必要。今までからだを動かしてこなかった為、皆さんと一緒に、森自身が汗をかけることをしていきたいと思う。

Q2 : 今日はナラ枯れ、マツ枯れ、シカなどが問題が出てきた。司会者でもゲストでもいいが、梅林が病気で根から伐られているというニュースがあった。昨年水戸でもあったようだ。学問的にどのように考えられるのか。京都にも梅の名所がたくさんある。

⇒A2 (柴田) : 一部で梅ばかり枯れるウイルス性の病気が流行っているようだ。水戸の偕楽園で半分くらい・・・予防の意味も含めていろいろな所で伐採されたようだ。京都ではまだ聞いていないが、北や城陽などの梅等もそういうウイルスにさらされるかもしれない。やってくれば情け容赦なく皆伐される事態は起こる可能性はある。他の地域の事例を見ているとそう考えられる。

(鎌田) また、同じものが長年集まった状態だと伝染病が起こりやすいということがある。マツ枯れやナラ枯れもある種単一林に近く、そういう状況が起こっているともいえる。なるべく色々なものが混ざっていた方が、良いだろうということにもつながると思う。

Q3 : シカの害で若芽が出ないことが問題。山すその農家も被害を受け近郊農家の耕作意欲が減退している。シカ駆除の対策で一番ネックになっているのが、鳥獣保護区の指定とも考えられ、動物愛護団体の人につかまったシカがもがいているのを見られると大変やということもあり、非常にこっそりと細々とわなをかけているという状況なので、若干反感を勝っても、もう一度一般市民に対してシカを捕獲して当然だという、これだけ害があるんだということを積極的に公的なところで打ち出していった方が良いのかなと思う。こっそりわなをかけていると、山をパトロールしている際に、そういう張り紙？などを見ると、おびえてしまうので、こういう安全な方法でかけているので大丈夫だということも(知らせる必要がある)。かなり本気で多くの人にシカを捕獲してもらいたい、またそれを許す条例の改正などもしてほしいと思っている。

⇒A3 (高柳) : まず、鳥獣保護区だから捕獲できないということはない。宝ヶ池という場を考えると、鳥獣保護区にしておいて、捕獲を進めることが適正であると言える。鳥獣保護区でなくなると、どこから誰が入ってとっても良いということになり、そちらの方が不安が大きくなる。保護区であれば有害捕獲という位置づけで一年中とることもできる。他の動物を守ることができる。本気で獲るかということでは、国が本気で獲る気になって法律も改正されている。今年から様々な形で捕獲が進められることになっているので、それについての理解は進むだろうし、行政も進めやすくなる。そういう中で動物愛護の立場から反対される方が居るとするのはよくあること。わなで大型動物を捕獲すること

を認めているのはヨーロッパではない。ヨーロッパでは銃で一発で殺すのは認めているが、わなでは認めない。日本のわな猟は、昔から行われているので引き継がれているが、その点から攻められると痛い点。ただ、わなにかかった動物は危険なので、わなに対して、こうだということがあるということを知ってもらうこと、山に入ってわながあっても不安になるのではなく、あればそれ以上近づかなければ問題ないことを学んでもらえば十分。

わなをかけるときに地元の方とここにわなをかけるということを合意形成していれば、地域住民の方が不安になることはないはず。散歩に来られるかたと調整までは対応しきれないだろうが・・・。

そのあたりは勉強会などを行って、猟師・私（高柳）・行政・地域住民と何度も繰り返し話し合う中で安全に進められるだろう。特に今年からは、夜も獲れるなど色々な話が出ているので、ますます地域住民との合意形成が大切である。

鎌田：ありがとうございます。本気で話し合うということ、本気で取り組んでいるのでいつでも呼んでくださいということだろう。

実り多いシンポジウムであったと思って帰っていただければありがたい。

## 市長あいさつ

みなさんへの覚悟を求められる。あらためて実感した・・・京都の魅力はなにか。三山の緑、地域力、それをささえる人間力、大学力、また人を引きつけてやまない魅力があるのですが、(先生方) ボランティアで出てきて頂いているということで、すばらしい物語づくりをしていただいている。ありがとうございます。

京都市内は75%が森、日本は65%。1000年を超える京都の歴史は、森の利息・恵みで生きている、いまもこれからも宝が池の美しい自然に感動させられる。実は厳しい状況ということをお話しても、あまり感じられない。地下鉄で20分でこんな森に来てすばらしい。しかし、外から見えてるところは良いが中には問題があふれている。

3月のはじめて小倉山にのぼった。鹿ヶ谷の山にもものぼった。土が流れて、木が倒れている。(その状況の説明を英語でなんとかと聞いた・・・が日本語ではないのか?と聞きましたが・・・)

ナラ枯れのあと、土が崩れてきている。立っていた木が倒れてきている。私有地なので同意をもらって、何本かを伐って、私も何本か植えてきたが、そんな状態が広がっている。いま取組まなければ防災の面でも厳しい状態ということはよく理解できる。

素晴らしい自然を未来にどう未来につないで伝えていくのか、みんなが覚悟をしてできることを積み重ねていくのか。それが大事ですので、京都市も責任を持って、みなさんとやっていくことが我々の覚悟である。これからもよろしくお願ひしたい。

NHKの内藤さん?と言う方がいる。震災のあと、八重のサクラの構想をうちたてドラマも実現されたすばらしい方。福島を日本中で植えようという取り組みをされている。福島で苗を育てて・・・種類は何かは一切かまわない・・・福島で育てたサクラをぜひ京都で植えてほしい。支援して、心をつないでほしい。震災から4年経ち、だんだん風化していく。一方で風評被害は消えない。一緒にやっていきたい。福島の桜を宝が池で植えてはどうかと思っているが、福島の山桜とは違うということなので、佐野藤右衛門にお願いして、この地に生えているサクラの苗を福島で育てて里帰りさせる。こういうことで、福島との支援、心をつないでいくことと、宝が池の緑・自然を守っていく取り組むことは心は一緒だと思う。そういうことを重ねたい。本日お集まりのみなさま、京都だけでなく他所のすばらしい大学関係者、NPO関係者、多くの方々みなさんと10年後20年後、素晴らしい宝が池の景色を楽しみたい。

どうもありがとうございました。

## 全体まとめ（京都府立大学・田中和博氏）

盛りだくさんの内容だったので、まとめも難しい。また第3部の中でまとめのような話も出てきている。振り返って感じたことを述べたい。

第1部では、「自然との共生感の中で生まれた日本の文化」というタイトルでお話いただいた。上村先生ご自身、南山城13万坪の山をもっておられ、ササユリが咲く山という。人が係わり合い大事にすることで里山ができるという言葉が印象的であった。また子どもたちに自然のしくみを伝えることが重要と理解した。私たちもそう考え、プレイパークの活動も一緒に色々な取り組みをやっている。

松枯れなど森林の管理不足の状況であれば、ボランティア活動のレベルでできていたがこの4・5年で状況が大きくかわってしまった。もはや市民ボランティアの手を超えている状況になっていると認識している。ナラ枯れの太い大きな木の伐採は素人ではできない。柵を設置するとなると多大な経費がかかってくる。防災面での心配も挙げられていた。そこには技術力・資金力も必要となる。市民ボランティアでは及ばないところがある。これは宝が池だけに限ったことではない。京都の市街地をとりまく三山いずれも同じような状況になっている。

宝が池が、他とは少し違うと感じるのは、ひとつは京都議定書が採択されたこと、地球環境問題の聖地としてシンボリックな場所でもある。地下鉄駅すぐで、市民が利用しやすい、地域の人々の森であるだけでなく、市民・府民の利用も多く、議定書の関係も含めて世界の人たちの関心の場でもある。

そのためここをモデル地区として取り組んでいき、世界にむけてメッセージを発信していく場所にしていく必要がある。環境教育のシンボリックな場としても非常にふさわしい。昔ながらの里山の復活はなかなか難しいが、今の時代・平成の里山とはどういうものか、あるいは、京都には昔から嵐山という人工的につくったすばらしい森林景観があるが、それにも匹敵する平成の景観としてどうするのか、シンボリックな場所として位置づけられるのではないかと思う。

実際に取り組んでいく際に、2つの視点があると思う。

ひとつは、シカをどうするのか、シカとの戦いあるいは知恵比べの段階、それが2・3年は続くと思われる。その間に森をどうするのかを多くの関係者の知恵を集めて具体的にイメージを築いていくべきだろう。実際に行動をしていく段階では、技術と資金力が必要になってくる。

京都市の多くの委員会の中に森林を再生させる為の人材づくりの委員会があり、そこに参与していて今、そのマニュアルをつくっているがシカ対策をしている間に人材をしっかりと育成し将来像も描いて発信していきたいと思う。

これからも活動を続けていきたいと思うので、今後ともご支援お願いします